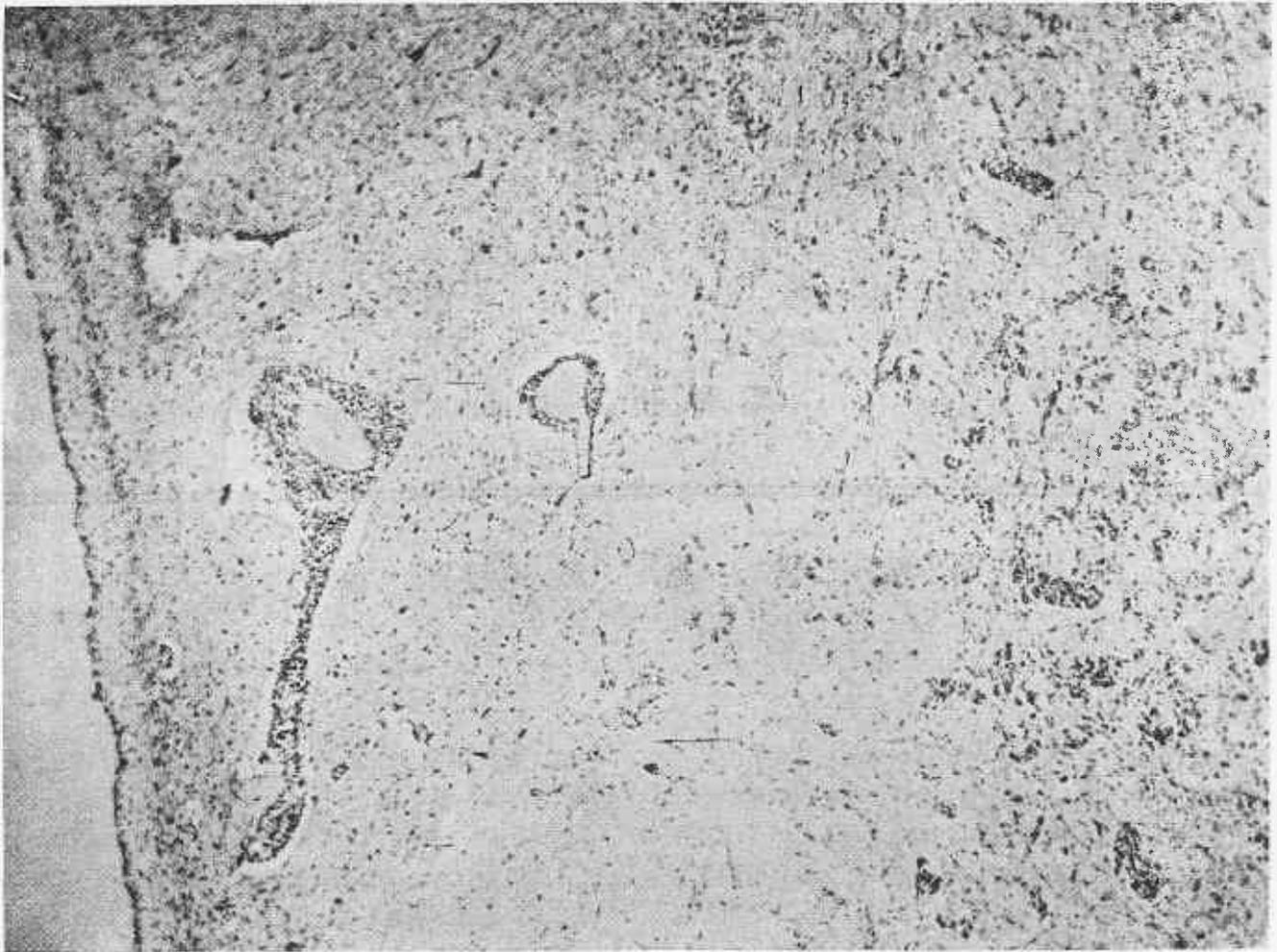


## 化膿性変化を殆んど認め得ないリステリア脳炎

岩手大学農学部獣医学科出題・第3回獣医病理学研修会標本 No. 30



緬・山羊の感染症として知られるリステリア脳炎は、*Listeria monocytogenes* により引き起こされるもので、我が国においても毎年その発生がみられ、決して珍らしい病気ではない。

形態学的には中脳神経系、特に中脳、橋、延髄等脳幹領域において認められる化膿性脳炎像がその特徴とされ、しばしば、膠細胞繁殖を伴う軟化病巣ならびに血管性細胞浸潤を伴う。

本例は7日の経過をもつて斃死したもので、この間ペニシリン、サルファ剤等を用いて治療が試みられている。死後の細菌学的検査により、脳脊髄各所よりリステリア菌を分離している。

病変像は表題にかかげた通り、化膿性変化を殆んど認め得ないもので、図（延髄、約60倍拡大、左が第4脳室）に示すごとく、広範な軟化病巣（図右）がみられる。こ

こには脂肪顆粒細胞あるいは格子細胞等が多数出現し、領域内神経細胞には種々の程度の変性が認められる。病巣の近くには円形細胞の血管性浸潤が著しい。グラム染色により、グラム陽性短桿菌が軟化巣内に点在するがその数は少ない。

要するに第一次病変と目される好中球浸潤がすでに下火となり、第二次病変と考えられる上記諸変化が主体をなすものと考えられ、その成因に関してはいわゆる宿主と寄生体との相関、あるいは薬物治療の影響等が考えられるが、いずれも明確ではない。

（编者註：リステリア脳炎は一見、非化膿性脳炎を思わせる場合の多いこと、RUNNELLS はその著書 "Animal Pathology" でこの脳炎を非化膿性脳炎に分類していることが追加された。）